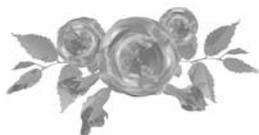


家庭生活を光明化せよ

◆ 本当の善き家庭は天国である

一日の勤勞を終つて、外から家庭へ帰つて来る時、或は店を看まもる時間が終つて本当にホームというものにわれわれが落着くとき、そこは實際吾々にとつて、天国でなければならぬのである。そこで吾々が楽しい晚餐に對うとき、吾らの前には、愛する家族たちの楽しい顔が並んでいる。吾らは互に愛情の籠つた微笑をえみ交わしつつ、その日にありしナンセンス(編註・取るに足らないこと)を語るであらう。この時、すべての窮屈さはとれてしまい、寛ろぎと、自由さと、愛の言葉と、榮養を



与えてくれる食物とが終日の吾々の勞苦をなくさめ癒してくるのである。かくの如く本当の善き家庭は實に天国であるのである。

(新編『生命の實相』第13巻・155～156頁)

◆ 小言の多い家庭は、地獄となる

私の知っている或る家庭地獄では、事務所から良人が帰つて来て、家族打ち揃つて晚餐の食卓に向うとき、そこが小言の審問所(編註・中世以降のカトリック教会において異端という疑いを受けた者を裁判するために設けられたシステム。またはその施設をいう)になるのである。良人は事務

所の色々の多忙な世間的な心遣いで神経が疲れていて、ちよつとしたことにもイライラしたくなっている。予想に反したお菜(編註・おかず)が食膳に並んでいると、最初は何の気もなくそれを不味いと小言を言う「何故こんなお菜をこしらえた?」と言つて咎める。この時、細君(編註・他人に対して自分の妻を謙遜するという語)は細君で折角の心尽しに小言を言われて引合つたものではないといふので不快な顔をするであろう。妻の不快な顔を見ていると良人の方では益々不快になつて来る。「終日、勤め先で労苦して、さて慰められようとして帰つて来たのにお前はそんな膨れ面をして私を迎えるのか」と言いたくなる。或はそれを言葉に出すか、言葉に出さなくともその思いが顔にあらわれる。互の不快が互の心と顔とに相反映して、面白くない家庭の空気はいよいよますます険悪になつて来る。良人は再びこんな家庭に帰つて来たくないと思う。それがたび重なると、彼は事務所からの帰りの足を他方に向けてることになつてしまわないとも限らない。世間の多くの家庭に於て、妻の不快な顔と良人の乱行とはこうして誘発されたものである。

〔新編 生命の實相〕第13巻・158〜159頁



◆自制がなければ、ニセ物の自分がのさばる

自制は諸徳のうちで、最も基礎的な徳であるのである。それは己れに打ち克つことである。「高き自分」が「卑き自分」に打ち克つことである。本物の自分がニセ物の自分に打ち克つことであるのだ。

もし自制がなければ、ニセ物の自分がのさばるのであるから、如何なるところにも平和と生長とはあり得ないのである。(中略)何故吾らは最も平和な慰めの聖所(編註・聖なるところ)でなければならぬ家庭の中に於てだけは、自制の徳を失つて、ちよつとしたことにも怒りを爆発さし、ちよつとしたことにも露骨に不快な顔を見せて、最も神聖な家庭の平和を汚してしまふことを惜しまないのであるうか。

すべてこれらのことは魂の弛みから来るのである。家庭に於ては感情を掻き乱した態度を見せても、イライラしく振舞つても、口ぎたなく罵つても、自分の社会的地位が危くない。馘首(編註・雇い主が使用人を一方的に解雇すること)される心配もないし、逐い出される心配もな

いし、そのために生活に困ることもないと思つて多寡を括つてゐる（編註・物事や人を低く評価して、見くびること）ので、ニセ物の自分が安心してのさばり出すのである。しかし家庭に於てイライラしく振舞つたり、口ぎたなく怒鳴りつけても、そのために生活に困ることはないと思ふのは大なる考え違いである。もし本當の吾らの楽しい生活の大部分が家庭にありとするならば、その家庭の空気を憂鬱なものにしてしまうことは、自分自身の楽しい生活の大部分を殺してしまうことになるのである。諸君はもしこれまでに昂奮して家庭の人々に口ぎたなく罵つた経験があるならば、罵ることによつて、決して自分の心が幸福にも愉快にもならぬものであることを実験していられるに相違ないのである。怒りを言葉にあらわし、表情にあらわせばあらわすほど、一層吾々の苛立たしい感情は高ぶり来り、頭に血液は逆上し来り、物狂わしいまでに吾々の心は苦しくなり、生理作用にも変調を来し、心臓の鼓動は高まり、心の調子が乱れて、甚だしい場合には死を招いたり、精神病になつてしまふことさえあるのである。実際、吾々は怒る事によつてまた虎のように吼えることによつて、一利（編註・わずかな利



益をも獲ることは出来ないものである。多くの家庭の病人は、この怒つても好いという良人の権利によつて製造せられている。

（新編『生命の真相』第13巻・160〜163頁）

◆妻の膨れ面が家庭を陰気にする

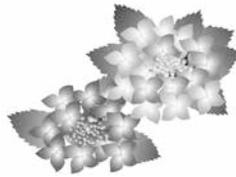
主人がこの「怒つても好い権利」をなかなか捨てないかわりに、細君は細君でまた良人に対して河豚のように膨れ面でも好い権利を主張するのである。ひとたび細君がこの膨れ面をしても好い権利を發揮するならば、如何なる輝かしい家庭でも直ぐ陰気な雲がかかつてしまふ。そこでは如何なる善きものも生長しない。明るい空気は消えてしまひ、飲びは窒息してしまひ、光線のない地獄のような憂鬱がその家を占領してしまふ。彼女が膨れ面をすることによつて、良人への面当てをしようとするのでもあろうし、無言の征服をしようとするのでもあろうが、彼女が膨れ面をすることによつて誰よりも征服されるのは細君自身であるのである。そこでは自分の本當の生命―明るい生命が自殺してしまふ。のさばり

出るのはニセモノの自分―暗い自分であって、それは自制の徳を失った報いである。膨れしてみたところで、別に分が一層気分がよくなるわけではなく、表情に不快をあらわせば、心は益々不快になるのが心の法則であるから、膨れ面をすればする程彼女の気分は悪くなり、悲しみは深くなり、胸はふさがり、心臓は苦しくなり、そんな事が度重なっていると本物のヒステリーにもなれば、時には肉体病にもなってしまうのである。鹽(編註・水や湯を入れて顔や手を洗ったり、洗濯に用いた容器)でも、籠(編註・竹・金属などで作った輪で、盥や樽の外側はめて締め固めるもの)を外したらバラバラになって使えぬようになってしまうであろう。自制力は心の盥の籠のようなものである。自制力を心から外してしまつては、心の盥の統制は失われてバラバラになってしまう。心の統制が破れたが最後、生命の水は浪費される。

(新編『生命の實相』第13巻・163～165頁)

◆統制のないところに調和も美もない

だけれどもそんな夫人でも全然自制力を失つたので



はなく、唯自制力を使わないだけなのである。もしそんなところへ知友(編註・互いに親しい友の誰かが訪問して来たという知らせがあつて、それ「来客だ」ということがわかると、たちまち今迄逆立てていた夫人の柳眉(編註・美人の眉のたとえ)が真直になり、顰んでいた(編註・不快なとき心配事のあるときに、眉間など眉のあたりにしわを寄せること)眉がひらいて、何事もなかつたように訪問客の前では気軽に話すことが出来るのである。それは夫人の心に自制力の籠が直ぐ餓まる(編註・緩んだ気持ちや規律を引き締め自制すること)からである。誰でも自制しうと思つたら自制出来ないことはないのである。良人の前では、自制しなくとも好いと思ひ、悪感情を曝け出して好いと思うからして、自分で自分の心を許して、家庭の不快を増進さす。こんな夫人は世間にざらにある。彼女は最初の不快を容赦もなく表情や言葉にあらわしてしまえば、気分がさつぱりすると思つているかも知れぬけれど、それでは感情は表情や言葉にあらわせば、却つて増大するという心の法則を知らな過ぎる言うべきだ。生活の歓び、肉体の健康、能力の増進はただ調和した空気の中でのみ得られるのである。調和と美

は統制によってのみ得られるので、統制のないところに調和も美もあり得ないのである。宇宙は一つの整然たる統制によって成立っている。もしちよつとでもこの統制が破れたら、この太陽系宇宙は存在し得ないのである。何故なら天体が宇宙的統制を破つて、ちよつとでもその軌道ハマミ出して運行することになれば、天体と天体とは互に衝突して、この宇宙は存在し得なくなるからである。

吾々が家庭に於て、魂の籠を弛めて、怒りにまかせ、苛立ちにまかせ、吼えたり嗷鳴つたりすることを自制しないならば、吾々はあたかも軌道を踏み外した天体と同じことで、家庭の他の人々と衝突して、家はあれども、家庭は存在しないと同じことになってしまうのである。

汝の家庭の人々が過誤に陥るとも、汝のお説教を止めよ、汝の怒号を止めよ、汝の擧め面を止めよ。しかし、しづかに「彼の実相」——「本物の彼」を見よ。いまだ如何なる過誤をも犯したることなき「神の子」なる良人を見よ、「神の子」なる妻を見よ、「神の子」なる子を見よ。「神性」に於て彼を見、彼の「神性」を祈り顕せよ。

(新編『生命の實相』第13巻・165〜167頁)



◆感謝と愛語と和顔が調和を生む

心の統制を一瞬時たりとも弛めるな。仮りにも不用意な乱れた語調の言葉話を話すな。すべてあなたの家庭につかわれる言葉をば「神の子」らしい洗練されたものたらしめよ。互を尊べ。何故なら、あなた達は皆な「神の子」であり、「神の子」の生活を成就するために家庭を造つていられるのであるからである。

すべて批評するものは批評され、罵るものは罵られ、怒るものは怒られ、心の槍にて刺すものは自分もまた心の槍にて刺され、心の刀で切る者は、自分もまた心の刀にて切られるのである。これは心の法則であつて避け難い。(中略)諸君の向うところに常に感謝の心と愛の言葉と、にこやかな表情とを投げかけよ。類は類を招び周囲を生かす者は自分も生きるのである。感謝と愛語と和顔の中にのみ調和ある空気は生れ、調和ある空気の中のみ生長と発達とがあるのである。

(新編『生命の實相』第13巻・171〜172頁)